

hito\*yume  
インタビュー

巻頭特集

# 山田満知子

伊藤みどり、浅田真央、村上佳菜子といった、その時代時代に常に世界のひのき舞台で活躍するフィギュアスケーターを育てている山田満知子コーチ。

そんな山田コーチが真に目指すのは、心からの「ふれあい」によって、それぞれの個性をいちばん輝かせることができるスケーターへと導くこと。

そこにあるのは、「スケーターを育てる前に人を育てたい」という熱い思いでした。



**TOSHIBA**  
Leading Innovation >>>

## いざというときの事業継続、 備えは充分ですか？

リモートクライアント



社外から、社内の自席PCに  
セキュアにアクセス\*1。

\*1: VPNなどでネット接続されている環境が必要です。

バックアップ



クライアントPCのデータを  
自動的にバックアップ\*2。

\*2: 帯域が確保されていれば、遠隔地のサーバーにもバックアップが可能です。

資産管理



利用中ソフトウェアの  
一覧管理が簡単に。

中堅・中小規模企業向けクライアント管理システム

# SmartUJ

### 資産管理、情報漏えい対策と 運用支援をこの1台で!

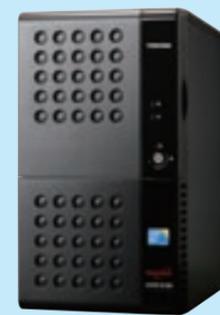
「SmartUJ」は、情報漏えい対策からPCの資産管理・運用管理、さらに自席PCのデスクトップ環境をネット経由で再現する機能(リモートクライアント)までもカバーする製品です。機能別の購入も可能で、導入しやすくなっています。

詳しくは

または、<http://smartuj.toshiba.co.jp/>

- ▶ リモートクライアント
- ▶ PCデータバックアップ
- ▶ 資産管理
- ▶ 操作監視
- ▶ 操作制御
- ▶ 不正PC検出・遮断

※Active Directory  
構築ツールを提供



高性能  
スマート

信頼性に優れた  
インテル® Xeon® プロセッサ  
X3440 以上を推奨

●「SmartUJ」は東芝の商標です。●Intel、インテル、Intel Logo、Intel Inside、Intel Inside ロゴ、Centrino、Centrino Inside、Intel vPro、Intel vPro ロゴ、Celeron、Celeron Inside、Intel Core、Core Inside、Pentium、Pentium Inside、vPro Inside、Xeon、Xeon Inside は、アメリカ合衆国およびその他の国における Intel Corporation の商標です。●Microsoft、Windows、Windows Server、Active Directory、Vista は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標または登録商標です。●本資料に掲載の商品の名称は、それぞれ各社が商標として使用しているものがあります。●資料の内容はお取り扱いに変更することがあります。

【やまだ まちこ】

1943年生まれ、名古屋市出身。7歳からスケートを始め、団体やインターハイで優勝、全日本選手権やインカレで入賞するなど活躍。大学卒業後はコーチとして伊藤みどり、浅田真央ら国際大会で活躍する選手を輩出。現在、村上佳菜子の指導にあたっている。また、グランプリ東海フィギュアスケートクラブのコーチとして子どもたちを初心者から指導。1989年文部省スポーツ功労者賞受賞、2005年文部科学省国際競技大会優秀者等表彰受章。

株式会社 **東芝**  
ネットワーク&ソリューション統括  
〒105-8001 東京都港区芝浦1-1-1  
Email: [pcman@ieg.toshiba.co.jp](mailto:pcman@ieg.toshiba.co.jp)

**東芝情報機器株式会社**  
プラットフォーム・ソリューション本部  
〒135-8505 東京都江東区豊洲5-6-15 (NBF豊洲ガーデンフロント)  
Email: [pcman.info@toshiba-tie.co.jp](mailto:pcman.info@toshiba-tie.co.jp)

東芝グループは、持続可能な  
地球の未来に貢献します。

eco スタイル

# どんな素敵なものも『やらされている』と思うと楽しくはないよね(笑)

## ハイカラな父の勧めで始めたフィギュアスケート

山田コーチは、名古屋を拠点に、世界で活躍するフィギュアスケーターを次々と育てていらつしゃいますが、そもそもご自身とフィギュアスケートとの出会いはどのようなものだったのでしょうか。

当時でいうハイカラな父の勧めで、7歳の時に始め、国体やインターハイで優勝するなどそれなりの成績も残しました。でも実は、自身が選手時代はスケートが好きでなかったですね(笑)。

最初から衝撃的な告白が飛び出しましたね(笑)。その理由も気になります。その前にまず、お父様はどうしてフィギュアスケートを勧められたと思いますか？

わたしは、1943年(昭和18)に名古屋市の覚王山というところで、兄2人に姉とわたしという4人兄弟の末っ子として生まれました。父は子どもの教育に関してはつきりとした考えをもっていた人でした。男の子である兄2人には、戦後の世の中は学歴が物をい

うと学業に力を入れさせ、姉とわたしの女の子の場合は何か身につけるものと習い事を勧めたのです。普通の公務員家庭であるにもかかわらず、姉にはバイオリンを、わたしにはフィギュアスケートを習わせたのです。戦後すぐの時代にバイオリンもびつくりですが、フィギュアスケートに至っては、名古屋のスケートリンクは戦争でなくなっていましたからね。満州帰りの音楽好きの知り合いに「いずれ名古屋にもスケートリンクができるだろうし、これからはフィギュアスケートがいいよ」と勧められたことが、ハイカラな父の心をくすぐってしまったんですね(笑)。今池というところに小さなリンクができるまでは、フィギュアスケートのためにクラシックバレエをやらされていたんです。

「やらされていた」というのが好きではなかった理由でしょうか？

そのとおり(笑)。花屋さんになりたい、パン屋さんになりたいと女の子なら誰もがそんな思いを抱く時に、「スケートを父親の趣味でやらされていた」わけですから。フィギュアスケートというのはヨーロッパから来たスポーツで、当時、日本にはプロのコーチがないのはもちろん、全く

たと思います。同窓会などで同級生に会うと「お前はいつもリンクリンクって言っとったよな」と。わたし自身はそんな記憶もないのですが、「フィギュアスケートの木下(旧姓)満知子」というのが、良くも悪くも当時のわたしだったのだと思います。

## 出会いを大切にしたら結果がコーチの道を開いてくれた

ではその後、辞めたくて仕方がなかったフィギュアスケートのコーチの道を選ばれたのは何があったのでしょうか？

わたしが高校生になったくらいから、東京や大阪ではプロのコーチが出てきました。そこで大学進学に際し、名古屋ではもう限界だろうと、東京6大学からお声がかかりました。父は非常に乗り気でしたが「娘をひとりで東京に行かせられない」という母の反対があり、わたしは辞めたくて仕方がなかったこともあり、「これはチャンス」とそれに乗じて大学進学で引退しました。しかし、これが不思議なもので、引退して名古屋に残ったことが、結果的にコーチの道へ進む自然な流れを生み出してしまったのです。

## 自然な流れを生み出したとは？

引退し、「普通の大学生活をエンジョイできる」と心躍っていたわたしのもとに、連盟の方から、試合の時の曲かけなどを手伝ってくれないかという声がかかったのです。月に1回あるかないかのことで、そんなに負担もありませんし、いままでお世話になってきたこともあり、軽い気持ちでお引き受けしたので。するとそのうちに、小さい子のお母さんたちからの「年配の方に習うより、できれば若い人に習わせたい」という要望で、「まっちゃん、見てやったらどうだ？」と。当時、名古屋にはプロのコーチはおらず、連盟の人たちもみんな東京へ出てしまっていたので、わたしに声がかかったのでしょうか。何かアルバイトはしたいと思っていましたから、いわばお小遣い稼ぎ気分です。コーチを始めたのです。

しかしそんな感じですから、結婚したら辞める気満々だったのですが、結婚した相手は海外出張が多く、妻が家でひとり待っているよりは外で生き生きとしてほしいと考える人で、辞めるに辞められず(笑)。それでもさすがに子どもができた時は辞め時だと、インストラクター協会もいったん辞めました。すると今度は、教え子のママたちが「赤ちゃ



女子フィギュアスケート個人にて優勝当時の山田(旧姓 木下)コーチ(1960年の全国高校選手権にて) 中日新聞紙面より

資料もなく、テレビもビデオもない時代。何もなくて、フィギュアスケートを勧めた父の知人や父、またスケート連盟の役員さんが会社帰りに来てくれ、みんなで外国から取り寄せた資料を基に、あじやないか、こうじゃないかと言いながら、遠回りですがフィギュアスケートを習うという感じ。毎日「嫌だな、嫌だな」の連続です。でも嫌だと言ったら家を追い出されちゃうんじゃないかと思いつながらスケートをしていましたね。

そんなご自身の意思ではないスケート漬けの日々の中で、学校生活ではどんな楽しみを見出しつついらつしたのでしょうか？

いい先生もおられたし、小・中・高校を通じて友だちにも非常に恵まれてい

んはわたしが抱っこしているから、やっぱり教えて」となり、さらに父たちも、自分が勧めたスケートを引き続きやっていることがうれいのでしよう、「孫を預かるよ」となり(笑)。つまり、自ら開拓したというより、さまざまな出会いがコーチをやる環境を整えてくれた格好になって、復帰となったわけです。

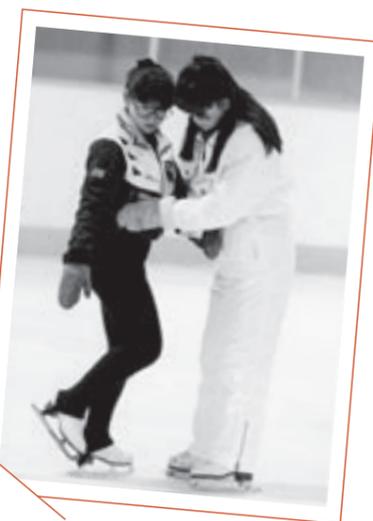
山田コーチのこれまでの活躍を考えると、少し意外な感じがしますね。

どうも、もつと自ら、バリバリやっていたんだらうと思われるようですね(笑)。だからキャリアウーマンについてとか、道を自ら開いてきた第一人者ということでよく取材されるのですが、そうではなく、どちらかというと、結婚生活も含め、何もかも無理しない形で来たのが、いま、こころなんです。

## 「強化型」ではなく、「普及型」のコーチとして

山田コーチの教え子で最初に世界の舞台上にデビューし、女子初のトリプルアクセルを成功させた伊藤みどり選手も、そんな自然体の中での出会いだったのでしょうか？

成長とは、小さな成功体験の積み重ねで得られるものだと思う。



伊藤みどり選手(左)に指導する山田コーチ(右) (1988年2月 カナダ・エドモントンにて) 中日新聞社提供

そうですね。「そんな中で現れちゃった」という表現がぴったりでしょうね。わたしの場合、能力があつて引つ張つたというところは一切ありません。いまでも、選手の育成用に整備された中京大学のオーロラリンクなどを使わせてもらっていますが、基本の指導場所はお金を払えば誰でも使える一般のスケートリンクです。みどりはそんなリンクの近くに住んでいて、共働きの両親がそこで遊ばせておけば安心だと思つたのでしよう、リンクを遊び場として一日中滑っている子でした。それが最初の出会いで、そのうちに「教えてもらえないか？」と言われたのです。

**誰よりも高く跳び、パワフルに舞う伊藤みどり選手のスケートは、世界の人々を驚かせ魅了しましたが、そこには特別な指導があつたのでしょうか？**

みどりは、まさにそれまでのフィギュアスケートの概念を変えたスケーターだと思えますが、彼女をそのように育てようとして取り組んだわけではないのです。コーチにはその選手を強くする「強化型」と、そのスポーツの楽しさを教える「普及型」の二つのタイプがあり、わ

たしは強化が得意だと思われているところがありますが、実際には普及型のコーチです。わたしのところに来ると強くなれる、オリンピックに出させてもらえると思われているようですが、昔は「山田先生のところにいったら、どんなお姑さんのところに嫁いでもやっていける」とか「山田先生のしつけが好き」ということで来られる人が多かったです。わたし自身、そう思われるように、技術よりも子どもたちとのかかわりを大事にしたいと思つていて、いまでは、それがスケートの上達にも大きく影響することが経験でわかっています。

ともかく、いちばん大事な幼少期から青春時代にスケートが大好きであつてほしいし、大好きであればうまくなれる。リンクに行きたい、先生に会いたい、お友だちと練習したい、何でもいいですが、スケートをやりたいという環境をつくるのがわたしの役割。みどりが何より優れていたのは、実はそこなのです。踊ることは最初から最後まで苦手でしたが、スケートに対するやる気と集中力はほかの子と段違いでした。本当にスケートが好きで、リンクに来て滑るのが楽しくてたまらない。それをまわりに感じさせる子だったので。

## 「山田ファミリー」の原点は木下ファミリー

**ふれあうことの大切さは、何かご自身の経験からでしょうか？**

本当に最近になって気づいたのですが、わたしの場合、父の影響をとて大きく受けていますね。わたしがいまやっているフィギュアスケートのクラブは、ク

伊藤みどり選手のあと、小岩井久美子、恩田美栄、中野友加里、浅田舞、真央姉妹、そして現在は村上佳菜子といたつた、次々と世界の第一線で活躍する選手を育て上げられました。それぞれ違う個性をもつた選手ですね。これは山田コーチなりの指導があるのでしょうか？

わたしは普及型のコーチだということを話しましたが、だいたいどんな子ともうまくやっていける許容範囲が広いことが、指導者としてのひとつの特徴だと思えます。それを可能にしているのは、ふれあいが指導の原点にあるからです。ふれあつて、それを深めているうちに、その子なりの個性を好きになり、それを魅力として受け止められる。そうすると自然に個々の個性が際立つたスケーターに仕上がっていくんですね。人間というのは、いくら見せまいとしても、自分の個性はなかなか隠せない。例えば、おつちよこちよいの人が落ち着こうと思つても、やっぱりどこかおつちよこちよい(笑)。しかしそこを魅力と受け止めれば、指導の仕方はあるのです。

もうひとつ、どんな子も必ず伸びていくことはできる。もともと2しかない子が20にはなかなかなれないけれど、

技術よりも子どもたちとのかかわりが大切。それが子どもたちの成長に大きく影響すると思う。



山田コーチの指導のもと、ジュニアグランプリファイナルで優勝した村上佳菜子選手(右)と(2009年12月 国立代々木競技場にて) 中日新聞社提供

## コラム

### なぜ「山田ファミリー」か？

山田コーチが教えるクラブは、いつのころからか、自然と「山田ファミリー」と呼ばれるようになっていました。その理由について「子どもたちだけではなく、ママたちともこちらから寄り添い、ふれあって、互いに学び学ばされるなかで指導をしているからかな」と山田コーチは言います。「親が密接にかかわることは、果たしてプラスかマイナスか？」を考えたとき、プラスの方が多く判断したことがその根底にあります。

「がんばっているけれど結果が出ないとよく言うでしょ。でも、そうじゃないの。努力すれば絶対なんらかの結果は出ている。小さくて気づきにくいというだけで。絶対にそれはある」と考えて、親とわたしがコミュニケーションをとって発見していく。そういうことを親もわたしも楽しめれば、子どもたちは自分の可能性を伸ばしていこうとするから」



**子ども時代に受けた影響は、やはり大きいということですね。**

これは親から受けた影響だけに限らないと思います。うちに来ている子どもたちは、スケートでたまたまわたしと出

クラブというより「山田ファミリー」と呼ばれることが多いのですが、教え子の親たちはうれしいことに山田ファミリーをこう評してくれるんです。「先生は子どもたちを選手というより、大好きな人として愛情をもって接してくれる」と。

その原点は、わたしが育つた家族・木下ファミリーなのだろうと思えます。フィギュアスケートに関してのやらざれ感はずいぶんありますが、父のことは大好きでした。弓道、水泳、登山、スキー、油絵など好奇心旺盛に何でもやっていて、日曜日には家族そろって父がつくったキャンパスに向かつてテッサンするというのもよくありました。わたしたち兄弟の友だちを家に呼ぶこともしょっちゅうで、そんなときには手製の紙芝居で楽しませてくれたりもしました。ふれあう楽しさを木下ファミリーでわたしは学んだんですね。いま、わたしの教え子たちは週末になるとよくわが家で泊まったりしており、ああ、同じだなと。

2を20にできなくても、2を7にし、7を15にすることはできる

# この秋、 読んでおきたい本

北 俊夫先生の**新刊本**紹介

北 俊夫  
きた としお\*福井県に生まれる。東京都公立小学校教員、東京都教育委員会指導主事、文部省(現文部科学省)初等中等教育局教科調査官、岐阜大学教授を経て、現在国士舘大学教授。



## 子どもの学力をつける学習評価

— 確かな評価観の確立のために —

“若い先生に伝えたい!!”  
シリーズ

「こうすればよい」ではなく、  
「なぜそうするのか」がわかれば  
実際の評価は自由自在!

- I 学力をどうとらえるか
- II これからの学習評価の考え方
- III 指導要録の様式と学習評価の課題
- IV 評価方法の工夫改善
- V 観点別評価から総括的評価へ
- VI 「総合的な学習の時間」の評価
- VII 保護者への説明責任

B5判 140ページ  
定価1,890円(税込)



## 授業のヒント60

— 授業相談 Q&A —

この本を読めば、きっと日々の悩みの  
問題解決、授業のヒントが見つかる!

好評  
既刊



B5判 152ページ  
定価1,890円(税込)

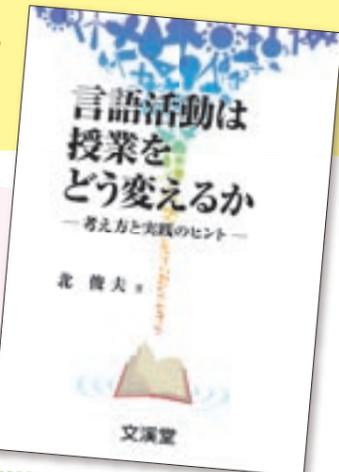
## 言語活動は授業をどう変えるか — 考え方と実践のヒント —

Books  
教育の泉1

明日からの授業に  
すぐに生かせる  
ヒントがいっぱい!

- I なぜ、言語活動の充実なのか
- II 言語に関する四つの活動
- III 「書く活動」を充実させる指導のポイント
- IV 「話す活動」を充実させる指導のポイント
- V 言語活動をどう評価するか

A5判 112ページ  
定価998円(税込)



## 魔法の言葉などはない あるのは、心を込めて伝える言葉

会ったわけですが、別の先生と出会って  
いたら、スケーターとしての形が変わって  
いたでしょうね。浅田真央も年齢を経  
て変わったということもあるでしょう  
が、うちにいたことと、外国に行ったり、  
また別の先生に習ったりしたことが影  
響もあって、いまの真央になっている。親  
の影響も大きいですが、親以外のプラス  
アルファの部分で変わる子たちも大勢  
います。だからこそ、幼少期から青春期  
にかけての年代に接する大人は、それ  
を十分意識すべきだと思います。

### 「待つ」というキーワード

スケートであれ何であれ、多くの子  
どもたちを育てていくというのは、い  
ろんな壁にぶち当たりながらの日々  
で辛いことも多いと思いますが、山田  
コーチはとても楽しそうですね。

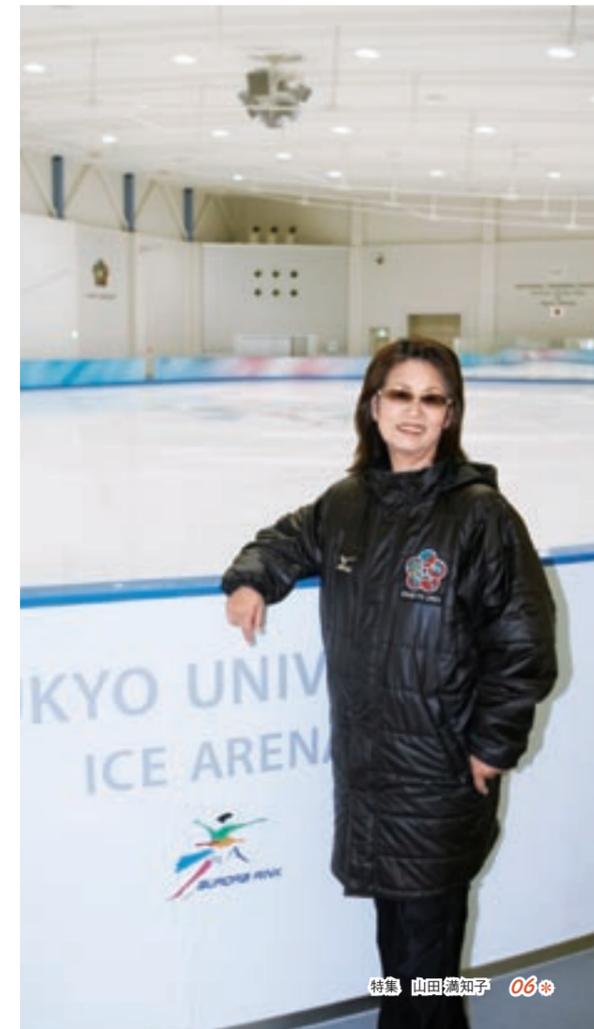
教えていると、人間のつながりつて、  
たまらなく楽しいと思える瞬間が必  
ずあるのです。言いかえれば、オリ  
ンピック選手であろうとなかろうと、わた  
しとふれあうことで、子どもたちそれ  
ぞれの個性が伸びていく。その素晴ら  
しい経験こそがわたしの宝物です。  
でも、こう思えるようになったのも、

経験を積んだ今だから(笑)。がむしゃ  
らに突っ張って生きてきた時間がすこ  
く長くて。昔の自分に何かひとつだけ  
アドバイスができるのであれば、「待つと  
よ」と言いたいですね。例えば若いころ  
は、教え子がジャンプを跳んで失敗し、  
その原因が腰が回っているからだと思  
うとすぐに呼んで注意していました。  
経験を積んだ先生に「もう少し待ちな  
さいよ」と言われても、待つてたらどん  
どん腰回っちゃうでしょとイライラし  
たりして(笑)。すぐに子どもたちがわ  
かってくれないと焦るんですよ。で  
も、少し我慢して見ていると、逆方向だ  
けど跳べたということがあったりして、  
いろいろその子なりの指導のヒントが見  
つかることが多いんです。

その「我慢」というのは、わかっている  
もなかなかできないものですよ。

それは、先ほどの2を7にはないけ  
れど、指導者自身も自分が少しずつで  
も向上したいと本気で思っているかど  
うかなんです。その本気度が高ければ  
我慢もできる。

もうひとつ、よく「本番直前にかける  
魔法のような言葉がありますか?」と  
聞かれますが、それはわたし自身が教え  
てほしいくらい(笑)。でもその時その時  
に一生懸命に考えるということが実は  
非常に大切なのだなと、経験を積んでき  
て強く感じるようになりました。何か  
特別な言葉ではなく、心を込めて伝え  
る。それが「ふれあう」ということの原点  
なのかもしれない、いま、思っています。



現在、山田コーチが拠点とする名古屋スポ  
ーツセンターから生徒を連れて、週に数日指導  
をする中京大学のアイスアリーナにて撮影